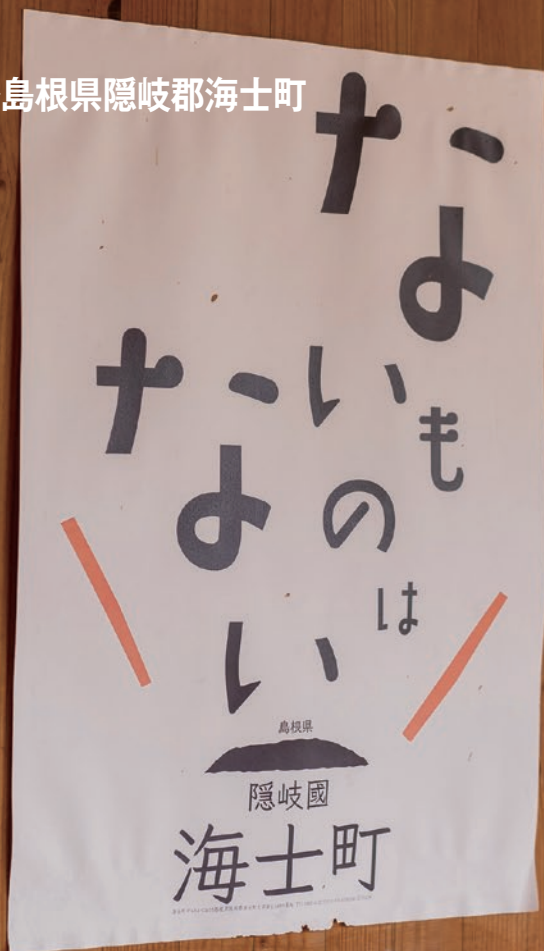


地域の底力

島根県隠岐郡海士町



Iターン、Uターンの風に乗り さらなる先へと歩み続ける 島根県海士町あまちようの終わらない挑戦

島根県の沖合、隠岐諸島の海士町は、
既成概念にとらわれない改革を重ね、
地域振興の先駆けとして
注目を浴びてきた。
人々の熱い思いは今もなお変わらず、
あらたなチャレンジが
重ねられている。



上／第187回国会の所信表明演説で引用され、話題になった海士町のキャッチコピー「ないものはない」。下／海士町は隠岐諸島で最も米作りが盛んなところ。2016年に島外向けに開発したブランド米「海士の本気」で、さらなる前進を図る。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一



海士町のある中ノ島ほか隠岐諸島の3島と、鳥取県の境港または島根県の七類港を約2時間～2時間半で結ぶフェリー「しらしま」。海士町を訪れる際には、同ルートで約1時間で走る高速船も利用できる。



町の厳しい財政状況を共有し、行政と住民の心はひとつに

島根半島の沖合約六〇キロメートルに位置する島根県隠岐諸島は、大小一八〇以上の島々からなる。その一つ、中ノ島全体を町

域とするのが、人口約二二〇〇〇人の隠岐郡海士町だ。

自然の恵みが豊かで、漁業はもちろん、名水百選にも選ばれた豊富な湧き水が田畑を潤



後鳥羽院を祀る「隠岐神社」(上)は、崩御から700年目にあたる1939年に創建。周辺には「海士町後鳥羽院資料館」(下)や行在所跡などがあり、散策を楽しめる。後鳥羽院の配流から800年目となる2021年は、さまざまな遷幸イベントが予定されている。

す農業が盛んな海士町では、縄文土器が出土するほど古くから人の暮らしが営まれてきた。歴史の舞台としては、聖武天皇がこの島を遠流の地と定めて以降、後鳥羽上皇をはじめ、殿上人を受け入れてきたことでも知られる。

「海士町のある中ノ島は奈良時代から、海産物を朝廷に献上してきました。身分の高い方たちが遠流されるのは、一説には島が、安全で食に恵まれていることから選ばれたのではないかとわれています」と話すのは、二〇一八年から町長を務める大江和彦氏だ。

この海士町が「地方創生のトップランナー」と言われるほど注目を浴びるようになったのは今から

約二〇年前、大江氏が町役場の職員だった二〇〇二年、民間企業出身の山内道雄氏の町長就任が転機になった。最盛期には約七〇〇〇人だった人口は、その頃半分以下にまで減少し、町の借金は約一〇〇億円まで膨れ上がるなど、ほかの地方以上に危機的状況にあった、と大江氏は振り返る。

「山内町長がまず打ち出したのは、自身を含む現場職員の大幅な給与削減でした。財政が厳しい危機的状況を住民に理解

してもらい、一体となって取り組むためです。我々の身を削る行動が伝わったのでしょう。暮らしに關わる助成金を自ら返納する動きが住民から出るなど、変化が見られるようになりました」

山内氏の陣頭指揮のもと産業振興に携わっていた大江氏は、澄んだ海域で採れる養殖岩ガキの「いわがき春香」やミネラルが豊富な牧草で育つ隠岐牛のブランド化、冷凍・解凍を経ても水産物の鮮度やおいしさが損なわれないCAS(注1)と呼ばれる凍結技術の導

「海士町が改革を進められたのは、行政と住民がともに地域の危機感を共有できたからこそ。危機感が共有されたことで、途中で議論が頓挫しそうになっても戻るべき原点ができました。多くの人が「変わらないと生き残れない」と本気で思っている町です」と話す町長の大江和彦氏。



(注1) CAS (Cells Alive System)：磁場エネルギーで細胞を振動させることで、細胞組織を壊すことなく凍結させることができるシステム。長期間にわたり鮮度や食感などをそのまま封じ込め、解凍後も取れたての旬の味を食べることができる。

玄関口・菱浦港に立つ「キンニヤモニヤセンター」には、「自立・挑戦・交流 × 継承・団結」、「みんなでしゃばる」という町の方針が掲げられている。



人により特産品の価値向上を図った。こうした取り組みを通じて町に雇用の方が生まれていったほか、生徒数の減少で廃校寸前だった地元の隠岐島前高校は、広く全国から生徒を招き入れる「島島留学」を実施したことで息を吹き返す。

斬新な改革の数々は世間の耳目を集め、その精力的な動きと島の人々の情熱に魅せられて移住した人たちもまた、自由な発想と挑戦ができる環境を与えられ、やがて次の改革の原動力になっていく。

「ないものはない」。生きるために必要なものはすべてここにあり



「キンニヤモニヤ」は町に伝わる民謡。毎年8月に開催される「キンニヤモニヤ祭り」は、島外から訪れた人を含めた1000人規模のパレードが行われる。(写真提供: キンニヤモニヤ祭り実行委員会)

る、ないからこそ良い、という意味を込めた、二〇一一年の宣言もまた多くの人々の心に響いた。

果たして、二〇〇四年〜二〇二〇年のイターナー者数累計は約七五〇人。そのうち三六〇人



環境省による名水百選にも選ばれた天川の水(上)。その水が流れ出る保々見湾の海水からつくる「海士乃塩」(下)は、海士町の特産品の一つ。

「みんなでしゃばる」動きが島内の各所で見られる中、物見遊山型の従来の旅行スタイルではなく、インバウンド旅行者から町民

島に信頼を置きながら地域を牽引する移住者

上が、現在(本年六月時点)も島で暮らす。Uターナーは約二〇〇名を数え、コロナ禍においてもその流れは途絶えていない。

大江氏が町長を務める現在も、改革は受け継がれ、山内氏が掲げた方針である「自立・挑戦・交流」に「継承・団結」を加え、さらには「みんなでしゃばる島づくり」を町の指針に掲げた。「しゃばる」とは方言で、強く引っ張るという意味だ。

まであらゆる多様な人の交流の拠点として期待がかけられているのが、二〇二二年七月にオープンしたばかりのホテル「Ento」。老朽化した島内唯一のホテルをリノベーションし、別館を改築しての再スタートをきった。客室からは、二〇一五年に認定された「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」(注2)の穏やかで美しい景色が臨める。

Entoを運営する株式会社「海士」の代表取締役の青山敦士氏は、も

右/島で生まれ育つ隠岐牛は、そのおいしさと希少性が相まって、首都圏をはじめ島外で高い評価を得ている。下/「島じゃ常識 さざえカレー」は、2000年の発売時に脚光を浴びて以来、息の長いヒット商品。



(注2) 前身の「世界ジオパーク」には2013年に認定されている。



Entô 内の様子。地球 46 億年の歴史を感じる化石の展示や、展示フロアや客室の目の前に広がるジオパークの景色から、隠岐の自然の神秘を体感できる。



「海士」代表取締役の青山敦士氏は、学生時代には途上国を支援する仕事に就くことを思い描いていたが、『先進国と途上国』と『都市と地方』の関係性は似ているので、まずは地方でチャレンジしてみてもいいのでは」との周囲のアドバイスを受けたこともあり、海士町へと人生の舵を切った。

ともと北海道札幌市出身。大学生だった二〇〇五年に先輩に連れられ、初めて海士町を訪れた際、町をどうしていくか真剣に議論する島の人人々の熱気に魅せられ卒業後に移住。海士町観光協会の社員として、町の活性化に携わってきた



経験をもとに、Entôへの思いをことう語る。
「海士町は単なる観光目的ではなく、学びや人との交流を求めて来られる方が多い。ですから、Entôは、来島者と島の人人との出会いをいかにデザインできるかを考慮し、人のつながりや情報を提供する拠点でありたいというのが一番の目標です。今後は島の入り口となっている港でのチェックインや、その対応に地元の高校生にも参加してもらい、かつ彼らに島内の案内をしてもらう、といったことも考えています」

移住から約一五年。自身を含めた人々の取り組みには、成功だけではなく失敗も数多くあったが、

成否にかかわらず挑戦を受け入れ、応援するのがこの島の魅力だとも。

「東京の進む方向に、地方が必死に追い付こうとする流れがあります。が、われわれが進むべきはその方向ではないと思っています。離島の海士町は、少子高齢化や財政難という日本の課題が凝縮された地域ですが、そういう地域だからこそ、東京とは違う進路を本気で進む、いわばタグボート（狭い航路で大型船を先導する船）になろうと、僕たちはさまざまなことに挑んできました。成功も失敗もすべて、これからの社会に何かしらのヒントになるはずだから挑戦を続ける。そんな意識がここには根付いています。この島の移住者にはスローライフや田舎暮らしへの憧れを持った人もいますが、一生懸命働きたい、何かに貢献したいという思いを持っている方が多いですし、その願いに応える島だと思います」



菱浦港からすぐの場所に位置し、港に入る前に来島者の目に飛び込む「Entô」は、全室オーシャンフロント。改築された別館の客室にはあえてテレビを置かず、ひとときをゆっくり過ごせる配慮がなされている。

地域振興の雄として今、海士町が示すべきこと

海士町の地域づくりや企業研修、地域コーディネーターの研修といった人材育成を手掛け、地元との振興にも深く携わってきた「風と土」と代表取締役の阿部裕志氏もまた、大手自動車メーカーを退職して二〇〇八年に移住した。移住者や多様な交流から見いだされる新しい「風」、町の人はその風



「小さな島だから、いる人でやるしかない。人は取り替えがきくものではない。『ないものはない』の最たるものは、人だと思います」と言うのは、「風と土と」代表取締役の阿部裕志氏。阿部氏は移住後の2008年に、「巡りの環」を創業。海士町だけではなく、都市や他の地域へも活動を広げることを目的として、2018年に社名を変更。（口写真提供：株式会社風と土と）

を感じ、その中からあらたな現実としての「土」をつくる。その思いが、社名に込められている。「大学でロケットの素材開発の研究をする一方、アウトドアや旅をする中で人の温かみに触れ、自然の美しさと厳しさを知りました。卒業後、大手企業に勤めましたが、グローバル競争で勝つために、周りの人を蹴落としてでも強くなる。その先に誰が幸せになるんだろう？」と疑問を持つようになり、そんなことを考えていた矢先、縁あって海士町に出会ったんです。この地で暮らす人々たちを見ながら、人と人が支え合い、自然の中で生きていく次の社会モデルを、ここから提案し、発信できるのではないかと考え移住しました。この島では、さまざま

まな人が未来の当事者としてこれからの社会モデルを作ろうとしているのが特徴です。私はそんな島に学びの場をつくることで、ほかの地域や組織に資する人を輩出したいという思いを抱き、そのための取り組みを進めてきました。そういう人材を求める企業が大手にも広がり、僕らの活動に共感し始めているのを実感しています」

実際、「風と土と」は大手企業から社員の出向を受け入れ、十社以上が研修に参加しており、その関心の高さがうかがえる。多くの企業が地方に目を向けつつある今、文化、価値観の違いを理解し、橋渡しができる人材の育成が必要だとも阿部氏は語る。

加えて阿部氏は、海士町が他地域より先を行くモデルとして挑戦し続けるため、これまでの実績を整理、分析し、そこに基づく仕組み作りを町と連携して進めている。

「これまで海士町では、特定の人を中心にあらたな挑戦が続けられました。しかし、今後のことを思えば突出したリーダーに頼らなくとも、あらたな挑戦が生まれ続ける仕組みを考えていかなければなら



りません。地方のタグボートとして先を行くため、さらには大江町長が言う『みんなでしゃべる』ためにも、その道筋を示していきたく考えています」

さらには、時代をつくる新しい知恵をこの島から生み出していきたいとの思いから、二〇一九年には出版社「海士の風」を設立。一冊目となる『進化思考』は発売後一週間で三万部を突破した。

「挑戦と交流を続けてきた島に出版社をつくることで、時代の先をつくる人や知恵がさらに集まりやすくなる。それが島の知を高め、海士という地のブランドの確立に資すると思っています」

新しい風が島に吹く マルチワーカーの 取り組み

青山氏や阿部氏ら、しゃべる人たちの発案により二〇二〇年一月に設立された海士町複業協同組合もまた、注目すべき存在だ。二〇二〇年に国の制度として発足した特定地域づくり事業協同組合制度のもと、日本初のマルチワーカーのための組織として誕生し、現在は男女計六名が所属。勤務先となる事業所には、青山氏の「海士」、阿部氏の「風と土と」も名



上／阿部氏によれば、対話を重ね、お互いの理解を深めながらものごとを進めるのが海士町のスタイルとのこと。課題も解決策も現場にあると、話し合いの場は写真のように屋外でなされることも少なくない。左／2021年4月、阿部氏が代表を務める出版社「海士の風」が世に送り出した最初の本、太刀川英輔氏の『進化思考 生き残るコンセプトをつくる「変異と適応」』。



雪野氏が働く漁船での作業は、少しの気の緩みが命取りになりかねない危険が伴うため、互いの協力が肝心となる。

(写真提供：海士町複業協同組合)



CAS冷凍で出荷される「いわがき春香」は、クリーミーなうまさとすがすがしい後味に魅せられる。

を連ねる。

組合の職員は、自らキャリアアップを立て、自ら働く場（事業所）を選択する。一年目は一カ所あたり三カ月、最低三カ所の事業所で勤める、島を知るインプットの時期。二年目は、二カ所程度の事業所で働き、三年目はそれまでの経験を踏まえつつ、徐々にアウトプットに重点を置いた働き方をする、非常にユニークな仕組みだ。

その第一号職員が、医療診断技術を専門とする工学博士の雪野瞭治氏。戦略デザインコンサルティングの会社勤務を経て二〇二〇年末に移住した雪野氏が最初に働いたのは、なんと漁業の現場だった。

島内で最も好きな場所だという、隠岐神社を背にした海士町複業協同組合職員の雪野瞭治氏。「この町は、生きる上で何を大事にしなければならぬかが分かっている、それを本当に大事にします」



たのは、なんと漁業の現場だった。そうだ。

「後から聞いたところ、漁業という命と隣り合わせの危険な職場に素人が入って大丈夫かと、当初受け入れ先は消極的だったそうです。ただ、お荷物な存在だったかというところがなかった。例えば、職人気質の漁師世界で素人にゼロから教える機会は離島ではほとんどありません。人に教えることで中堅の漁師さんたちにとって身につくものがあつたと聞きました。また海から見る朝焼けの景色や新鮮な魚介類を前に僕が感動していると、漁師さんたちは、自分たちの職場や仕事への誇りも改め

て思い出したと言われました。そのほか、例えば藻が網につくと魚の収穫が落ちるのですが、理系の僕が、対応策を提案するなど、技術的にアドバイスできることもありました。大変喜ばれ、自分の知識が役立つたのはうれしかったですね」

今では女性が初めて定置網漁に携わるようになるなど、雪野氏の活動は大きな影響を及ぼしているという。

雪野氏はその後、水産物の加工現場を経て、現在は水産加工物の通信販売のサポートをはじめ複数の業務をこなしている、と話す。

「同じ島の中でも複数の仕事に



雪野氏がサポートする、「ふるさと海士CAS事業部」のeコマース。
(写真提供：離島通販 島風生活。)

携わることで、ものを見る視座が広がります。またそれぞれの現場の思いや課題を当事者として経験できる。同じ水産加工をするにも、漁業者、加工、販売、マーケティングそれぞれを経験することで、いずれは各工程の橋渡しの役割が担えるかもしれません。いろいろな挑戦をするこの島では、いつも、どこかで誰かが課題を前に悩んでいます。とにかく人が必要とされ、感謝される。その小さな営みの連続です。しかも離島ですので、自分が携わったことがどこに影響しているのか、実感



海士の本気米生産組合の組合長波多剛氏は島内で唯一の米専業農家だけに、地元のみでの流通だけでは将来的に厳しいと実感しているという。今後、米とCAS冷凍の水産物のセット販売も検討中。

農家の未来のために 進められた 米のブランド化

できる。奇抜にも思えるようなアイデアにも真剣に耳を傾け、実践に移してもらえ。毎日が面白すぎて、体がもうひとつあればいいのに、と思いますね」

定置網につく藻の軽減や、深海での食材や酒の熟成など、島での経験から生まれた雪野氏のアイデアは尽きない。話を聞きながら、青山氏や阿部氏が島で暮らし始め、挑戦を重ねながら覚えた胸の高鳴りを、次の世代の雪野氏も実感しているように感じ、地域振興の雄、海士町の力を見た思いがした。

あらたな挑戦は、伝統産業でも

見られる。その一つが、七軒の農家が共同で取り組み、二〇一六年に発売された米「海士の本気」だ。背景には農家の高齢化、離農、後継者不足が続き、海士町の美しい田んぼの景色が消滅するかもしれないという危機感があつたと話すのは、海士の本気米生産組合組合長の波多剛氏だ。

「海士町は昔から稲作が盛んでしたが、島内で消費して終わるのが当たり前でしたから、そのままでは農家の所得は上がりません。この島の大事な宝である米作りを若い世代に引き継ぐには、島外に販売を広げていく必要がある。僕を含めた立ち上げのメンバーは、未来に向けた海士町の米作りの土台をつくりた

島の北部、のどかな田園の中に建つ宇受命神社は、平安時代の「延喜式神名帳」に名が記されたほど歴史が古い。



いとという気持ちから、ブランド化にチャレンジしました」

土づくりには隠岐牛の堆肥や岩ガキの殻を使用することで、島内でものが循環するようにした。減農薬で育てた米はミネラル分が豊富になり、もちもちの食感も生まれたという。

販売開始から五年が過ぎた現在、高値にもかかわらず連携した東京の大手百貨店では上々の手応えがあり、通信販売やふるさと納税の返礼品、島外への贈答品や土産物としても人気が高い。リピーターが増えているのは、そのうまさの評価された証しだろう。

今回の滞在で実感したのは、島でふつうに食べられている米が実においしいということだった。やわらかなうまみと軽快な後味は、忘れがたい記憶を残したが、「海士の本気」はその特徴を際立たせた感じがある。

「この島では、自分が栽培した野菜や米を振る舞うのが日常。自分で食べきれない分は、よそに分けるのが当たり前なんです」という波多氏の話には、自然の恵みに育まれた島に住む人々の豊かな心が垣間見えた。この島の風土、そしてその風土が育んだ人々の心のあ



島内を巡れば、気持ちの良い海の景色と同様に緑が広がる水田の美しさも記憶に刻まれる。



地域とのコミュニケーションを深めながら島で働く「大人の島留学」は、広く全国から若者たちが集まり、この中から、海士町移住を考える人も生まれているという。(写真提供：海士町)



2021年には、Entôや「風と土と」も関わる「オープンアイランド」の取り組みがスタート。農業体験や高校生とともに歩く「山菜ハント」ほか多彩なアクティビティを体験しながら、島を訪れた人がより多くの住民と交流できるイベントとなっている。(写真提供：海士町観光協会)

りようは、遠流された殿上人から現在の移住者まで、「よそ者」を受け入れてきた懐の深さにも関わっているのかもしれない。

若い世代が島に集まる今、次なるフェーズが始まる

世間に先駆けたタグボートのアイデアや活動は、ほかにも島内のあちらこちらで生まれ実践されていると、町長の大江氏は語る。その一つが、学生や若手の社会人を対象にした中长期移住制度「大人の島留学」。インターン生として働く若者たちが島にあらたな風を



海水浴場やキャンプ場も設けられ、女神がお産をしたという神話が伝えられる明屋海岸。

吹き込んでいっているという。また、今後も起こるであろうさまざまな島での挑戦に対し、一億円を超えるふるさと納税の一部を運用する一般社団法人海士町未来投資委員会が設立されるなど、資金面の援助体制も整備され、期待が寄せられている。そのほかにも、大江氏が

進める、役場の職員が地域振興につながる現場に積極的に携わる働き方改革「半官半X」がある。いわば、行政版のマルチワーカーで、他地域にはない取り組みとして注目される。

さらには、島留学を実施してきた島前高校の卒業生たちが、進学や就職でいったん島を出た後に戻ってくる還流が生じていると大江氏は顔をほころばせた。

「大人の島留学のインターン生や隠岐島前高校の卒業生の還流による若い世代が、今、あらたな挑戦を始めているのがうれしいですね。これまで移住者を受け入れ、成果を出してきた結果、住民はあらたに人が入ることで町が元気になることを認識し、移住者の存在は特別なことではなくなっていると思います」

多くの移住者をひきつけ、地域の生きる道を本気で考え、模索する海士町。この町では、あらたな風を吹き込む移住者、そして豊かな土としての島民が、島の未来やそれに向けた取り組みを真剣に議論し、失敗を恐れず挑戦し、その挑戦を応援しながら、未来へのバ

トンを確実につないでいる。そんな島内では、すれ違ふ子どもたちすべてが挨拶をしてくれたのも印象的だった。現代社会で失われつつある温もりが、海士町では当たり前前に生きている。これまでにまかれた種はこの先、どのようにならぬのか。前進し続けるであろうタグボートがこれから先どこに行くのか。海士町から目が離せそうにない。



町の玄関口である写真の菱浦港をはじめ、島内のそこかしこに、豊かな自然が彩るのどかな景色が広がる。